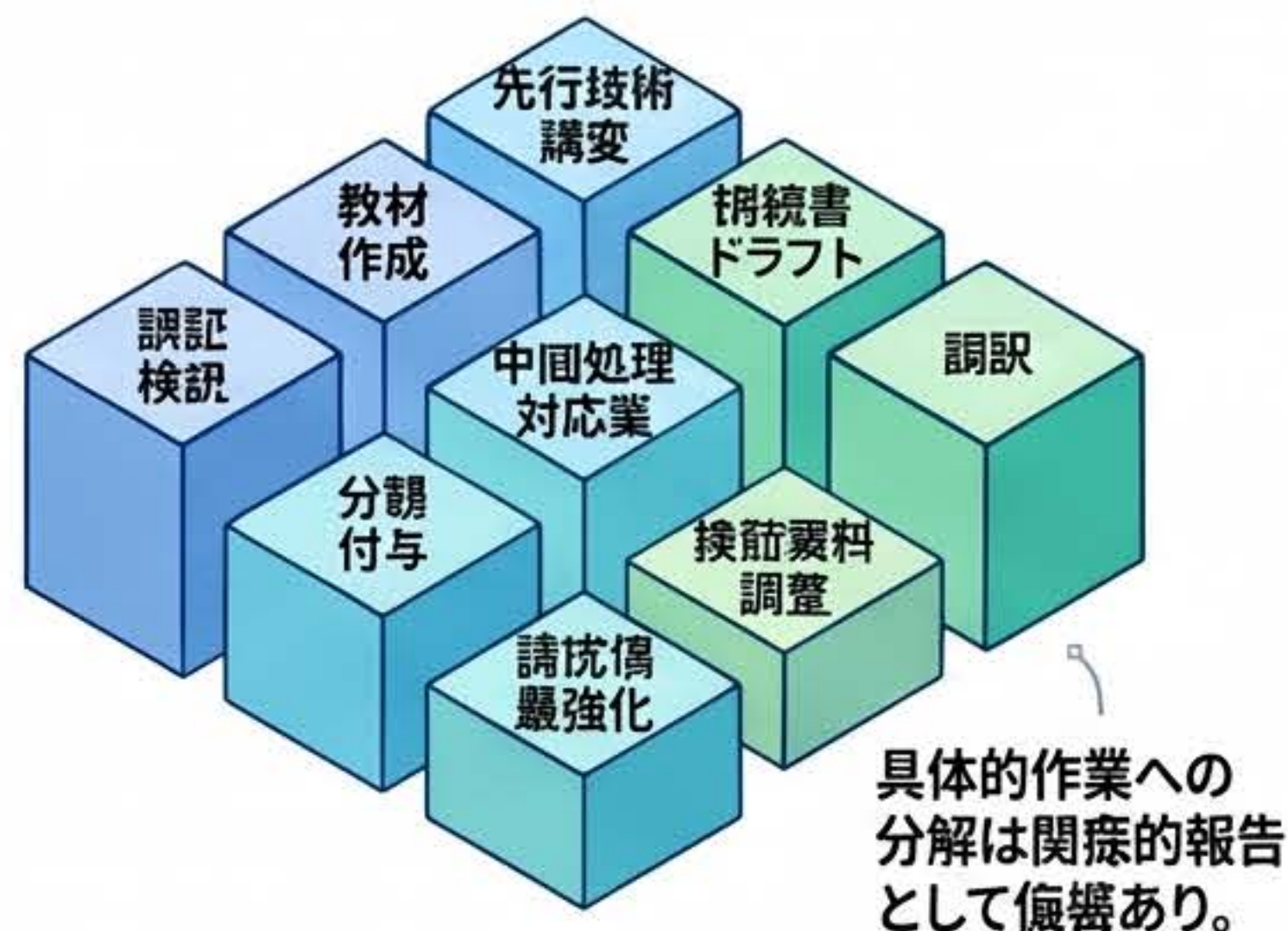


特許実務における生成AI：活用の可能性と実務上の境界線

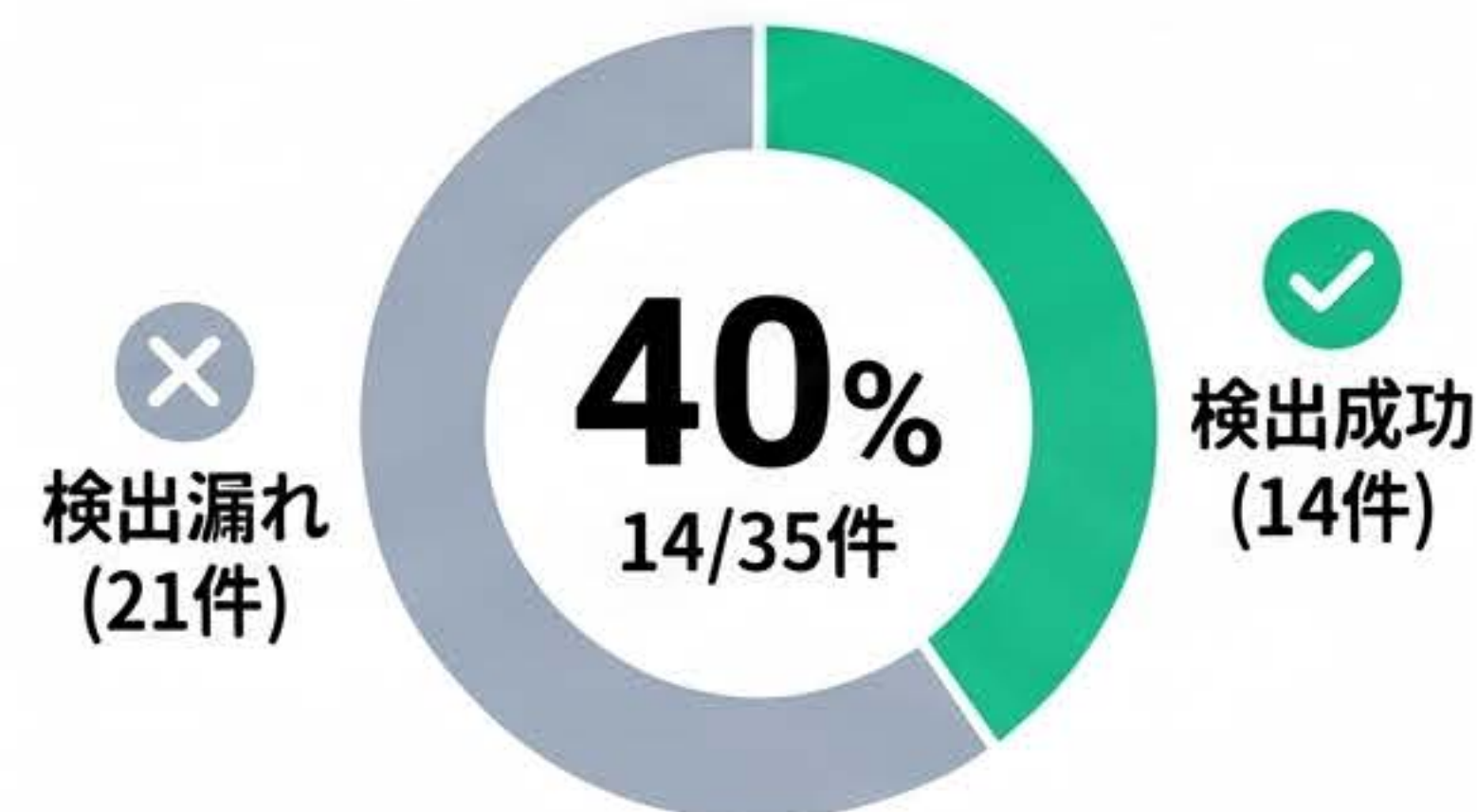
生成AIの特許実務への利用可能性を検証し、有用性と現状の限界、実務導入に不可欠な視点を提示。

現状の評価：可能性と限界

実務に即した10の業務工程で利用可能性を示唆



誤証検出率は40%(14/35件)に留まる



AIによる検出漏れは多く、Word等の既存ツールとの比較検証が必要。

「もっともらしい回答」が「法的に正しい」とは限らない



情報量が多くても、新規事項の追加や不適切な論点が含まれるリスクがある。

現状の評価：可能と条件

評価軸	判定	判断の要点
実務的意義	✓ 高い	業務工程に即した10事例と失敗例を提示
精度・効率化	⚠ 限定的	正解基準の欠如や、検証を含む総工数の測定不足
再現性	↑ 補強が必要	モデル条件やプロンプトの公開が限定的

実務導入への必須条件

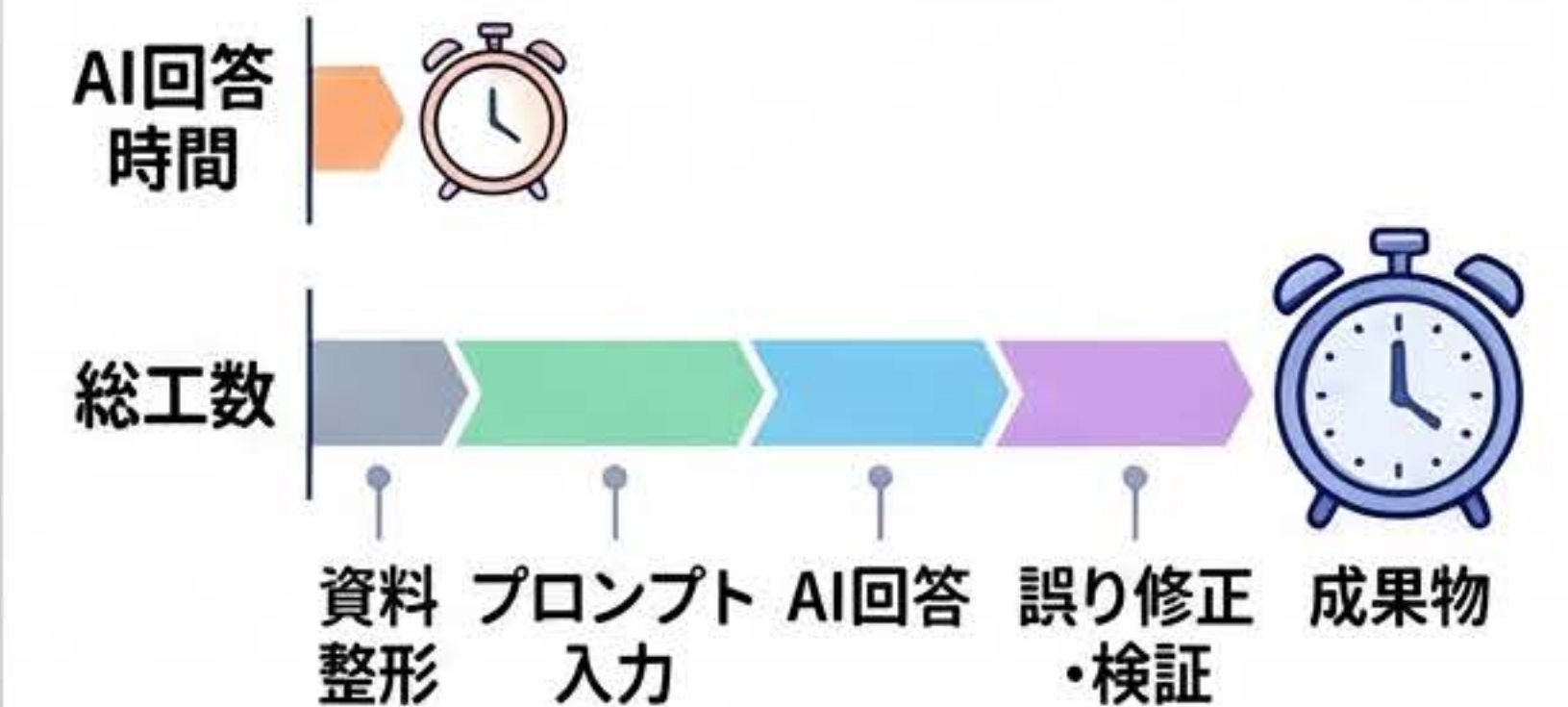
専門家による「人間中心」の検証プロセスの構築



最終成果物の責任は人間が負い、項目ごとに確認基準を定めるべき。

生成AIの特許実務への利用可能性検証し、有、有用性の現状世界を提示。

AI回答時間だけでなく「総工数」で効率を測定



資料整形、プロンプト入力、誤り修正を含む全作業時間を比較する。

機密保持ガイドラインへの適合と合意



秘密情報を入力する際は、学習利用の有無に関わらずクライアントの同意が必要。